
綾 第二章

葛城

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

綾 第二章

【Nコード】

N5798H

【作者名】

葛城

【あらすじ】

『綾』の続編です。お読みになれる方は、『綾』を読んでから読むことをお勧めします。

プロローグ（前書き）

『綾』の続編です。お読みになられる方は、『綾』を読んでから読むことをお勧めします。

また、この話は残酷な描写やグロテスクな描写がところどころあつたりしますので、閲覧には注意してください。少しでも自分には無理だと判断したら、すぐさま読むのを止めてください。

プロローグ

雨が降っている。

それも、にわか雨とかの話ではなく、文字通り滝のような勢いの雨粒が、激しくコンクリートを叩いていた。一寸先すら見通しできないくらいに激しい雨が絶えず降り続け、時折耳が痛くなるくらいに五月蠅い雷鳴が、辺りを一瞬だけ明るく照らしていた。

いつもなら月のぼんやりとした光が綾の目にも留まったのだが、今ばかりは分厚い雲が邪魔をしているおかげで、辺りは手元すら見えなくらいに真っ暗だった。

郊外の外れにある、建設中止になった廃ビル。そこで、綾は雨宿りをしていた。

「……………雨ね」

濡れた衣服や下着を適当な場所に引っ掛けて、素裸のまま振り続ける雨を見詰めること数時間。どちらかといえば美少女といえる程度に可愛い面容、少し膨らみを見せている胸、肉付きの薄い尻、目のやり所に困る姿だったが、肝心の少女は気にも留めていなかった。

（……雨だね）

綾の独り言に答えるように、綾の中で声が響いた。桃色の唇から、ふう、とため息が漏れる。真っ暗な中でも爛々と鈍く輝く赤い瞳をそっと瞼で隠すと、水浸しになった床を足でトンと叩いて、踵をひるがえした。

（どこに行くの？）

綾の中の少女が尋ねる。綾は声を出さずに、自分の中にいる彼女へ呼びかけることで答えた。

『散歩』

（これで4度目よ）

『暇なの』

（それはそうだけど……）

『お腹だつて空いたし、ダラダラと待つのも結構辛いよ。何かして気を紛らわさないと、とてもじゃないけどジツとしていられないわ』

今しがた居た客室から出ると、長い廊下が横へ広がっていた。もちろん、電気など通っているはずもなく、廊下は文字通り暗闇しかない。

だが、綾には関係ない。墨汁で塗りたいくったような暗闇でも、綾の視界では昼間のように明るく映っていたからだ。

そんな暗闇の中を、綾は臆することなく闊歩した。一定の感覚で設けられた個室のドアを二回ずつノックしたり、意味もなく廊下を往復したり、階段を下りたり登ったり、とにかく適当に時間を潰した。

(それでも広いわね……)

『そうね』

綾は声に同意した。

散策すること4回。その中で見つけたゆうに200人は入れそうな馬鹿でかい風呂とキッチン。無駄に内装に凝ったロビーに、よく分からない銅像。暇に任せて隅々まで散策したおかげで、この施設の中に残されたエロ本の場合まで分かったうえで、綾は改めて広いと思った。

『それにしても、ここの施設がどんな目的のリゾートを狙ったのかは知らないけど、今の外観からは旅館かホテルにしか見えないわね』
陥没して出来た水溜りをそつと飛び越え、音もなく着地する。

元々はリゾート施設として建設されていたらしい。らしいというもの、施設に入らないように入り口付近に張ってあったフェンスを飛び越えたとき、このビルについて書かれた看板をただけで、ここがどういったリゾート施設なのか全く知らないからだ。

どういう理由で中止になったのかは綾には分からない。雨で水浸しになった衣服を乾かすには丁度良かったので、このビルに身を隠した程度のことだ。知りたいとも思わない。

ぐう、と綾のお腹が鳴った。手で押さえると、薄い脂肪の奥から、食料を催促する音が響いた。

綾は苦笑して、お腹を擦った。

『お腹空いたわ』

（最後に食べたのは二日前……だったかな？）

『三日前よ』

（……そうだっけ？）

『そうよ』

ふと、脳裏に最後の食事のことが蘇ってきた。ジワジワと唾が口内に滲み出てくる。ゴクリと、綾は喉を鳴らせて唾を飲み込んだ。

『あゝ、お腹空いた……』

むにゅむにゅと柔らかい脂肪。

コリコリと歯ごたえのある筋肉。

クラクラしてしまいうくらい苦味のある血の味。

噛めば噛むほど旨味が滲み出る骨や内蔵。

喉を通っていく感覚を思い返すだけで、綾は堪らなくなってもう一度唾を飲み込んだ。

（そんなにお腹空いているなら、美味しそうなヤツを捕まえに行けばいいじゃない。簡単でしょ、綾なら）

それはそうだけど。分かっていると言わんばかりに、綾は頭を振った。

『そういうわけにもいかないわ。万が一見付かるわけにもいかないし、人の目は何処にあるか分からないもの。獲物は確実に、かつ絶対に見付からないと確信してからじゃないと、安心できないわ』

獲物。

綾の指すその単語は、決して比喻ではない。文字通り、綾は獲物を……人を狩って今日まで過ごしてきた、人の目から逃れ、人の世界から隠れ、人を襲って食う人外が存在。それが、綾だった（……それもそうだけど……あんまり無理しないでね）

頭の片隅から響く自身を心配する言葉に、綾は答えなかった。

ただ、あの日の出来事を、あの町の出来事を、喜一と過ごした町を出てからの日々を、ぼんやりと思い返していた。

プロローグ（後書き）

ああ、リアルが忙しすぎる。書く時間が本当に無い。彼女欲しい。

題1話（前書き）

この話にはグロテスクな表現や、猟奇的、カニバリズム（食人）表現が多々あります。

気分を悪くされたりする場合がありますので、少しでも無理だと思ったらブラウザのバックでお願いします。

題1話

喜一と過ごした町を旅立ってから、早3週間。山を三つばかり越えたあたりで、ようやく綾は山間に広がる町にたどり着いた。

そっと、山間部の中から町の様子を伺う。常人なら、建物がミニチュアぐらいにしか見えない距離でも、綾の目にはその建物の間を行きかう人々の姿も盗み見ることが出来る。

行きかう人々の群れ、のどかな町並み、田んぼや畑、鋼鉄の並々を見る。前の町と比べて、綾はこれから向かう町が、少し田舎ではないか、と思った。

「……やっと着いた」

（……やっとね）

ワンピースの裾に付いた埃と泥を手で払いつつ、綾は大きくため息を吐いた。身体が鉛のように重い。両足は地面と鎖で繋がったかのように吸い付き、手を上げるのすら億劫に感じる。吐き出す吐息にすら疲労が込められていそうだ。

それほど、今の綾は疲れ切っていた。

「……思っていたよりも、時間が掛かったわね」

埃が被った黒髪を、手で掻き抜いて埃を振り払う。埃程度なら綾の身体はある程度体内に吸収してしまうので、少し指で梳くだけであつという間にくすんだ色合いが艶のある輝かしい光沢を取り戻した。

（そうね。それに、意外と距離もあったし）

「ええ……本当、人の目から逃れて移動するのもくたびれる」

ここに来るまでの短い日々が脳裏をよぎる。極限まで人目を避けて行動し、かつ誰にも姿を認識されないようにするため、一般道路は使わず獣道や舗装されていない道を突き進んできた。

もちろん、高速道路などは絶対に使えないし、バスや電車などの交通機関も使えない。というより、お金を持っていないので使えな

いのだが、たとえ持っていたとしても使うことはなかっただろう。おかげでトンネルなども使えず、おまけに山の中を何度も往復する羽目になってしまった。

それでも3週間で山を三つ越えられるあたり、綾の異常な身体能力がうかがい知れるのだが。

（今度から地図でもない、また道に迷うわよ）

「ええ、今度は服と一緒に地図も盗んでおくわ」

ぐう、と綾のお腹が下品にも存在を誇示した。今まで他の事を考えることで誤魔化していた食欲を意識した途端、切なさにも似た飢餓感が腹部を襲った。

だが、我慢しなくてはならない。

せめて夜にならなければ……夜になれば、暗闇に紛れて……。

繁茂する雑草の陰に隠れつつ、綾は空を見上げた。雲の隙間から見える太陽は、空高く。ひたすら太陽の姿が流れていくのを眺めた。

夜空高くに月が浮かんできた辺りで、綾は行動を開始することにした。

急な斜面に生えた木の陰から、そっと眼下の町並みを見下ろす。

そこにあるのは、家々が密集した住宅街。正確な時間は分からないものの、場所のせいか、立ち並ぶ家々は沈黙を保ち続けていた。ぽつり、ぽつりと街灯と明かりが見えるものの、人影らしき物体は綾の目でも捉えられなかった。

「……どうやら、まだ誰にも気づかれていないようね」

ぐう、と綾のお腹が鳴った。静かに、唇を噛み締める。鋭い犬歯が小さな唇を噛み切り、少量の血が喉を流れていく。

こくん、と喉を鳴らして血を飲み込む。そうやって自前のものでも胃に入れば、少しは気が紛れる。山越えの最中に学んだ、綾の侘しい知恵だった。

「……うう、お腹空いた」

（あともうちよつとだよ、綾）

答えたのは、綾の中に居る彼女だった。

（ここまで来れば、あとはすぐ）

「……いえ、ここまで来たからこそ、慎重に行動しないといけない」
それでも、綾は臆病なくらいに慎重だった。

下手に足音を立てないよう一息に斜面から飛んで、黒い影となる。
そのまま両足のバネを使つて、コンクリートの地面に音もなく着地する。素早く近くに止められていた車の陰に隠れて、綾はため息を吐いた。

そのまま、ゆっくりと時が過ぎるのを待つ。辺りに人の気配は全くない。

痛みすら伴いそうな冷たい夜風が、綾の剥き出しの手足を舐めていく。繁茂している雑草が、風が吹くたびに、まるで黒いナメクジのようにざわざわと蠢いている。

あたりに人の気配が無いのを十分に確認してから、そっと立ち上がった。その場を後にした。元はかわいらしい造形だった靴は、山歩きしたことによって泥だらけになっていて、舗装されていない地面をとぼとぼと踏みしめていた。

少ない街灯は、あたりを明るく照らすにはあまりに頼りなく、街灯から少し離れるだけで手元も見えなくなるくらい視界が閉ざされてしまう。

だが、綾は構わず歩を進めた。常人では視認することすら出来ない光度でも、綾の優れた両眼は昼間と変わらない光景を綾の脳に伝えていたおかげで、暗闇に不満を覚えることは無かった。

「……はあ、ちよつと疲れたわ」

（ちよつとどころじゃないでしょ。もう立っているのも辛いくらいじゃないの？）

「意識を保つのすら辛いわよ。でも、凄く疲れたって言ったら、本当に動けなくなりそうだから、ちよつとってことにしているのよ」

（……せめて、動物でもいいから食べれば……）

「嫌よ。動物なんて味気ないし、不味いわよ。いくら食べたって腹の足しにもならないし……やっぱり人間よ、に・ん・げ・ん」

ぐう、と腹が鳴った。ぐらりと歪む視界に、綾は舌打ちした。

前にも山から自力で下りたことがあるとはいえ、あの時とは比べ物にならないぐらいに険しく、深く、さしものの綾も、山を越えてビニールハウスがチラホラ目立つ田園まで辿り着いたときには、しばらく休息を余儀なくされた。

食事さえ必要量行っていれば、綾の肉体と体力は全く疲労しないうえに、回復すらしてしまうのだが、あくまで食事をしていければの話だ。

食事が出来なければ、いくら強靱な肉体でも、次第にエネルギーが底を尽いてしまい、肉体の機能を維持できなくなる。肉体の機能が大きければ大きいほど、それを動かすエネルギーも重要になってくる。

全身の骨を砕かれ、頭を破壊され、胸に風穴が空いても意識を保ち、生命を維持できる綾の弱点。

それは以外にも、他の生命と同じ。必要なエネルギーが確保できなければ餓死する他の生命と同じく、綾も食事を取らなければ死んでしまうということだった。

山越えを経験することで、その事実を改めて思い知った綾は、これからはもっと慎重に行動し、自身の肉体を過信し過ぎないよう心に深く刻み込んだのだ。

ふらりとよろめく足腰に力が入らない。立ち止まってゆっくり深呼吸すると、霞んだ視界のピントが合わさっていく。

ああ、いけない。これは本当にやばいかもしれないわね。

弱気になるつもりはない。だが、焦りはある。慢性的なエネルギー不足による疲労は、鉛のように体を重くし、気力を根こそぎ奪っていく。

ちらりと視線を畑へ向ける。そこには小振りながら葉を実らせている大根が、規則正しく縦横並列に並んで植えられていた。

「……………」

無言のまま畑に下りて、身近の大根を引き抜く。出てきた大根は綾の知っている大根より一回り近く小さかったが、それでも立派に実っていた。

その大根を半分に折って、さらに縦に半分に折る。そして泥の付いていない中身に顔を突っ込んで、ガブリと大根を噛み千切った。しゃくり、しゃくりと大根特有の歯ごたえが伝わってくる。

「……不味い」

と、同時に口内にある大根を全て吐き出した。

「やっぱり食えたもんじゃないわ」

大根を放り捨てて、泥が付いた両手を叩く。

ぐう、と綾のお腹が盛大に抗議した。ため息が零れた。

「あゝあ、お腹空いた……………ん？」

ふと、鼻腔に香った匂いに綾は鼻を鳴らした。湿った空気が、頬を撫でていったと同時に、ぽつりと綾の鼻に水滴が当たった。

雨だ。

そう思った瞬間、ぽつぽつと降り始めた雨は一気に豪雨となって綾の体に降り注いだ。

同時に、遠くから近づいてくる小さな光を見て、綾はニヤリと笑った。見るものを心底恐怖させる、おぞましい笑みを浮かべて。

少しずつ、光が近づいてくる。車の生み出す重厚な躍動音は無い。雨の音にかき消されていることから、綾はその光の正体を自転車であると推測した。事実、当たっていた。

光はどんどん大きくなり、肉眼が自転車に乗っている人の姿を把握する……瞬間、綾は風になった。

人間が大きくなる……傘を持った男……年はそれなりに老いている……こちらに気づいていない……長ズボンに厚手のコート……男の視線がこちらへ向く……より先に、綾の右手が男の首に触れた。

ぶちり。

会話すら妨げる煩い雨粒の中、綾は確かにその音を聞いた。泣き叫ぶ暇も、逃げる挙動を行う時間すらない。男の最後だった。

二つに離れた男の頭が、泥の中を転がっていくのを尻目に、綾は素早く男の胴体に腕を突き刺す。剥き出しになった首の裂傷部に口付けて、自転車を蹴飛ばした。

蹴飛ばす、と言っても、綾の脚力は並ではない。十数キロはありそうな自転車は、細足からは想像すら出来ない力によって水平に飛び、畑の中へ消えた。

ごくり。ごくり。ごくり。

頸動脈から噴出す血液を、貪るように飲み干す。頬に感じるもう一本の頸動脈から流れ落ちる血液が男の衣服を汚し、水溜りだらけの地面に流れ落ちていく。その光景に後ろ髪を引かれつつも、綾は久しぶりの食事に喉を鳴らした。

苦くて、甘くて、熱い血液が喉を通っていく。喉に絡みつくそれは、瞬く間に全身の倦怠感を拭い去り、それどころか活力すら全身から湧き上がってくるのを、綾は感じた。

美味しい、美味しい、美味しい美味しい美味しい美味美味美味美味美味美味美味美味美味美味！――
（ふふふ、綾ったら、久しぶりのご飯だからって、我を忘れすぎよ）
彼女の苦笑交じりの忠告も、理性を飛ばした綾には届かなかった。
既に血液を吐き出すポンプでしかなかった心臓は、主が死んで
いるのすら気づかず血液を大量に吐き出していく。

•
•
•
○

一口、また一口、血液が喉を通っていく。音を鳴らしていく。

男の体内に残っていた血液が無くなるに連れて、流れ出す血液の量が少なくなってきた。こうなると、いくら心臓が頑張ったところで意味は無い。

舌を尖らして、血管の中をほじくるように突き刺す。唇どころか

ら首元まで血に汚れるのも構わず、血を啜る。

そうして死体から徹底的に血を絞り取ってようやく、綾は顔をあげて大きく息を吐いた。血の生臭さが、夜の中をじわりと広がった。げふ、と綾は行儀悪くゲップした。

「あゝ……生き返った。本当に生き返った。久しぶりのご飯がこんなに美味しいとは思わなかった」

（もう、搾りかすも出ないんじゃない？）

「絞れば出るわよ。喉も潤ったし、次は……お肉ね」（ここで？）

「もっと違うところじゃないと、見つかるかもしれないじゃない」赤い水溜りを蹴り上げて、転がっていた生首を拾う。そのまま綾は降り注ぐ雨の中を凄まじい速度で駆け抜けていった。

後に残ったのは、不気味に広がる赤い血溜り。だがそれも、雨によって少しずつ掻き消されていき、数分後には痕跡すらなくなっていた。

再び山の中に戻ったときには、雨も止みかけていた。綾は、絶対に他人に見られないように木々の陰に隠れると、そつとご飯を木に立てかけた。

頂きます。

両手を合わせ、頭を軽く下げ、溢れた涎を手で拭ってから、大きく口を開き……。

「あゝん」

剥き出しの肌に歯を突き立てて、引っ張った。プチプチと皮膚と筋肉の繊維が千切れて、赤い内部が外気に晒された。血に塗れた赤い遅筋と白い速筋が、不思議なコントラストをかもし出していた。

唇から垂れ下がった肉を舌と歯で口内に招き入れて、咀嚼。コリコリと歯ごたえのある筋と、皮膚の柔らかい感触。口内でとろりと溶ける脂肪に、綾は舌鼓を打った。

「うん……やっぱり美味しい」

(……がつつきすぎだってだってば)

よほど意地汚いように見えたのだろう。だが綾は構わず目の前の肉に齧り付く。血で真っ赤になった口元を手で拭いっつ、綾は頬をリスのように膨らませて肉を頬張った。

奇跡的にも汚れていなかった右目の眼球を指で抉り取って、口に放り込む。水晶体の何ともいえない歯ごたえと、中に詰まっていた房水の味が口内に広がる。脊髓を取り出して、中の髄液を啜る。栄養がタツプリ詰まった肝臓を舐めるように味わい、大腿骨辺りの硬い筋肉をかみ締める。

そして最後にコリコリとした歯応えのある心臓を腹に収めたとき、ようやく綾は一息ついた。

「はぁ……お腹いっぱい」

丸く膨れたお腹を撫でながら、綾は満腹感につかの間の幸せに身を委ねた。

題2話（前書き）

久しぶりの続話。たぶん、もう誰も覚えていないだろう。（ていうか、初めから誰も知らないだろうね）

題2話

1月16日（火）

今日で日記を書いてから丁度半年になる。我ながら随分と長く続いている。三日坊主にならないことをほめたいくらいだ。

最近、色々なことがあった。何を隠そう、健二の奴が2組の晴香さんと付き合い始めたという悪夢のような話だ。

何をどう間違っただの Ero 魔人と付き合おうと思ったのだろうか。確かにあいつは Ero 魔人で人前で平気で下ネタ話するような奴だけど、けっこう面白い奴だし……ああ、それか。

しかし妬ましい。なんてったって、晴香さんは巨乳だ。もう、デカイ。体育のときなんて胸が弾むんだぜ。ぽよんぽよんだぜ。おまけにけっこう可愛いときているし……まあ、健二なら、いいかな。ちくしょう、俺も彼女欲しいな。晴香さんみたいとは言わないが、やっぱり目の前で浮かれる友達見ると欲しくてたまらなくなる。

そういえば、今日聞いたんだが、何でも高木の奴が今行方不明らしい。人伝だから正確なのかは分からないが、どうも本当らしい。ていうか、あいつってすげえ不良じゃん。授業どころか学校に来ることがほとんど無いし、来たら暴れまわるし、居なくなっただ方が良かったじゃん。

それにあいつ、裏ではもう女を襲っているとか薬売っているとかヤクザと付き合っているとか、そういう話をちよくちよく聞くし。

高木といえば、竹田のやつも最近連絡が取れないらしいな。まあ、あいつも高木と同じぐらいやばい奴だし、今頃何やっているのかね。

……そうそう。昨日のことなんだけど、なんか不思議な女の子を見かけた。この寒い中、黒のワンピースを着ている変な子に。寒く

ないのかな、肩ひもから見える素肌が凄く白かったけど……あまり関わらない方がいいな。

あれはブラも付けていないな。うっすらと乳首浮いていたし。でも、不思議な雰囲気の子だったな……なんていうか、ゾクって背筋に鳥肌が立った。

なんなんだろう……どうしてか、冷や汗も止まらなかったし、凄く怖かった。

俺よりも頭一つ分以上小さい子なのに、顔だって可愛い方なのに……いや、可愛いっていうより、綺麗……なのかな。

怖いくらいの美人……っていうより、美人なくらいに怖い？

言葉じゃ、上手く表せない。なんだろう、とにかく、怖かった。蛇に睨まれた蛙っていうのかな、あれは。あっちは俺のことなんで気付いていないみたいだったけど。おかげで、俺がオシッコ漏らしたことばれずに済んだ。

でも、あの子何処へ行ったんだろ。あっちは潰れたビルとか、怪しい店しかないんだけど……。

……でも、ああ、本当に怖かった。俺、今生きているんだよね？

セツトしておいた目覚まし時計が煩い。自分でやったとはいえ、毎朝起こされる瞬間は、いつも目覚まし時計を壊したいと思ってしまっ

まう。重たい瞼を上げて時計を確認する。うん、大丈夫。二度寝していない。

時々気付かないうちに時計を止めてしまうから、時計は常に二個使っている。

布団から身体を起こす。途端、冬の糞冷たい空気がなだれ込んできくる。おかげで一発で眠気は消しとんだが、身震いしてしまうくらい一気に気分が落ちた。

やっぱり冬場の布団は人を引き込む魔力がある。それはもう、常

人では抗えない程の魅了の力がある……と、俺は思っている。

欠伸を噛み殺しながら部屋を出る。自室の部屋以上に冷えた廊下は、俺の素足から恐ろしいスピードで体温を奪っていく。

いいかげん、朝起きたら靴下くらい履けばいいと思うが、家で靴下を履くのが嫌いだから絶対に履かない。誰が何と言おうと、これだけは譲れない。

リビングに入ると、既に親父は仕事へ向かったのか、飲み残しコーヒークップとパン屑が残った皿がテーブルの上に置かれていた。

俺は手早く食器を洗って、自分の朝食を済ませた。朝だし、冷蔵庫に入っていたヨーグルトでも十分だ。

トイレ、洗顔、着替え、それらをさっさと終え、俺は学校指定のコートを羽織って玄関の扉を開けた。

ふわりと、白い塊が頬をくすぐった。

「雪？」

思わず呆気にとられた。最近は雨が多く、気温も下がっていたから、もしかしたら雪が降るかもしれないと思っていたけど……。

視線を下げると、既に雪は数センチ程積っていて、雪の絨毯が出来ていた。

ワン、ワン、と、隣の家が犬が煩く吠える。犬は庭駆け回ると言うが、この寒い中元氣だ。おまけに性格も獰猛で、家先を通るだけで親の仇と言わんばかりに吠えまくるし、下手に手を出そうもんなら噛みついてくるからな……俺だけに。あの犬、なぜか俺だけには懐かないんだよな。大型犬で毛もフワフワしているから一回くらいは撫でてみたいのに。

そんなことを考えている今も、相変わらず吠えまくる隣家の犬。

……なんか、吠え過ぎじゃないか？ 元氣があるにしては、何と
いうか、違うような……。

ハッと我に返って袖をまくって時間を確認する。

……やば、もうこんな時間だ。顔を上げると、降り注ぐ雪の密度と勢いはさらに強くなっているように思えた。両手が塞がるのは好

きじゃないから傘は使いたくなかったが、この天気なら仕方がない。傘を取ろうと玄関へ振り返った……瞬間。

自分でもビックリするくらい、身体がビクンと痙攣した。

「え？」

こんな声が出せたのが自分でも不思議に思えるくらい、高く掠れた音が喉から零れ落ちた。

ジワリと体中から脂汗が滲み出て、着たばかりのシャツを湿らしていく。伸ばした手は残像が見えるくらいに震え、額から流れた汗が目に入って痛い。

なのに、目が閉じられない。閉じたら、終わりだ。

俺は愕然とした。なぜ、俺は今そう考えた。

なにが終わりだ？

なんで終わるんだ？

かちかちかちかちかちかちかち。

……なんだ、この音は。

かちかちかちかちかちかちかち。

耳に響く、固いものをぶつけ合ったかのような音。どこから音がしているのか探そうにも、俺の身体が針金で固定されているかのようにならず、視線は薄汚れた傘立てから逸らせられない。

かちかちかちかちかちかちかち。

ちくしょう、煩くて堪らない。

そんなときだった。俺の耳に、かちかちという音以外を拾ったのは。

さく、さく、さく。

クツキーを噛んだときのような小気味良い音。どこか懐かしいこの音は……。

さく、さく、さく。

雪を踏む音だ！

誰かが、俺の背後に居る。俺に、向かってきている！

がちがちがちがちがちがちがち！

高鳴る音。ここにきて、俺はようやく気付いた。この音は……

がちがちがちがちがちがち！

さく、さく、さく。

がちがちがちがちがちがち！

さく、さく、さく。

俺の……俺の歯だ！

俺の歯が、ガチガチと歯をかち合わせていたんだ！

ぼたり、ぼたりと涎が零れ落ちる。ぬるりと、舌に感じる涎とは別の鉄臭い味と臭い……血だ。俺は今、血を流しているんだ。

俺の意思から離れた顎は、壊れた玩具みたいにただ歯を鳴らし続ける。痛みは、無い。痛みを感じる暇は、余裕は、無い。

そのとき初めて、俺は恐怖を覚えた。幼い頃に見た、激怒した親父の顔、凄んでくる不良の顔、そのどれも違う、別種の恐怖。

さく、さく、さく。

足音はもう、俺のすぐ後ろに来ている。

さく、さく、さく……さく。

足音は、俺の後ろで止まった。

頬に感じる熱い液体を感じて、泣いていることに気付いた。

ちくしょう、なんだよこれ。俺何かしたかよ。こんないきなり突拍子もなくこれかよっていうか怖いよなんだよ後ろのやつちくしょう死にたくねえまだ俺童貞だぜっていうか死ぬって俺なんで死ぬなんてアニメやドラマじゃあるまいああ死ぬのかっていうか死ぬってああもう馬鹿だよちくしょう展開早いよっていうかああもうもうもう……夢だろ、これ。

後ろの何かが、ゆらりと動いた……ような気がした。

俺は笑った。なぜか、笑いが込み上げてきた。ちくしょう、意味分かんねえよ。ちくしょう。

ギャン！ ギャン！

死を覚悟した瞬間、隣家の犬の、狂ったような雄叫びが辺りに響いた。

同時に、空気に消えるように、ふう、と背中からの重圧が消えた。俺は転がるように家に入り、鍵を閉めてチェーンを掛けた。今まで感じたことがないくらいに激しく、心臓が高鳴っている。がちがち煩い顎を顔ごと膝に埋め、俺はその場に座り込んだ。零れた涙と鼻水がズボンを濡らしていく。

「うう、うう、うううううう」

今頃になって、うめき声が喉から出た。

俺は、助かったんだ。何が何だか分からないが、俺はそう思った。

失敗した。

誰かの家の庭隅に隠れた綾は、今しがた這いずって家に入ってしまった男のことを考えて、舌打ちした。

本当なら今頃あの家の中でゆっくり口封じを兼ねた朝食を楽しんでいたところなのに……この犬のせいで。

チラリと視線を、狂ったように吠える犬へ向ける。自分の腰まであるその犬は、尻尾を逆立て、牙をむき出し、興奮で充血した瞳をこちらへ向けていた。

耳障りに感じるくらいに煩いのに、この家の住人は誰ひとり出てこない。どうやら、普段からこの犬はこれくらい鳴くみたいだ。

おかげで、余計な手間を増やさなくて済む。

失敗だった。

あの日の夜、いつものように食事を終えた綾が一時的な寝床と決めていた廃ビルに向かっている最中、その姿をあの男に見られたのだ。

自分でもあまりに神経質になりすぎていると思うが、念には念を入れた方がいい。ただでさえ、食糧調達で学生の間で話題になっているのだから。

居なくなっても変に思われないような人間を相手にしていたとはいえ、さすがに食欲のままにいけば不審に思われる。

幸い、今はヤクザやそういう人間と関わりのある、夜の人間を相手に狙って獲物にしているとはいえ、そろそろ数も30人程になる。人の噂も油断ならない。いつ、どこで、嘘に真実が混じるかは分からないのだから。

「仕方ないわね……また、次の機会にしましょうか」

（また、夜まで我慢だね）

中に彼女も、同意する。

立ちあがって、溜息を吐く。雪程度の冷氣など、冷たいうちには入らないが、降り注ぐ雪は、少し鬱陶しい。

そして、今だ吠え続ける犬を見つめた。

「うるさいわ、黙りなさい」

静かな声。

なのに、有無を言わさない絶対的な言葉。

そのたった一言で、あれほど騒いでいた犬は口を閉じて、耳を塞いで、尻尾を丸めて、自身の寝床である犬小屋に入って行った。

「……ああ、それにしても、上手いように事が進まないものね」

綾はそっと、唇を尖らした。

題2話（後書き）

編集等は随時していきます。

番外 如何にして少女は彼女に惹かれたか（前書き）

久しぶりの更新

番外 如何にして少女は彼女に惹かれたか

かげやま・ちづる
影山千鶴という少女の異常性の片鱗を見せたのは、7月25日の
茹だるように暑い日だった。まだ彼女が4歳の頃だった。

おかしい。

保育の先生が鳴らした競技用のピストルから火薬の臭いが漂う。
同時に走り出した同じ組の男の子達を見て、首を傾げた。

どうしてあの子たちはあんなにゆっくり走っているのだろうか？

バタバタと手足を振り、ゴールへ向かって走って行く友達。同じ
組で一番足が速いと聞いていた男の子の姿を見て、千鶴は再び首を
傾げた。

どこが速いのだろう？

確かに、その男の子は速かった。腕の振り方、足の運び方、何よ
りスピードが違った。同じ園児と比べても大した違いはないものの、
元々の素質からか、コースを半分程走ったあたりで、既に回りの園
児から身体3つ分はリードしていた。

それを踏まえた上で、千鶴は遅い、と判断した。

そんなことを考えている間に、その男の子は一番にゴールし、続
けて幾人の園児がゴールラインを走り抜けていった。

「はい、次の人たちは並んでね」

胸の大きい、お母さんに似た先生が千鶴の肩を押した。初めて、
千鶴は自分の番が来ていたことに気づき、あわてて他の園児達のよ
うにスタートラインに並んだ。

日差しが、熱い。ジツとしていても噴き出してくる汗に、千鶴は
不愉快を覚えた。元々、走ることは好きじゃない。それよりも、お
ままごとや、一輪車で遊んでいる方がずっと好きだった。

遠くから聞こえる蝉時雨が煩い。保育の先生が掲げるピストルに、

自然と千鶴の視線が向かった。

アレが鳴ったら、走ればいいんだ。

引き金に掛った指に力が込められていくのを、千鶴は見詰めた。それに合わせて両足に力を込める。靴裏に感じる砂が、体重に負けてズズズッと削れた。

「よいい」

先生の一言を最後に、静まりかえる園内。

千鶴は黙って先生の指を見つめ……引き金が引かれると同時に走り出した。

身体が引つ張られるように前方へ乗り出し、グッと頭を下げて、走りやすい態勢に身体を倒した。

思いつき走ろう。

そう思って、腕を振り上げた途端、背後からホイッスルが鳴った。その音に心臓を高鳴らせた千鶴は、喉元までせり上がった悲鳴をなんとか呑み込むと、背後へ振り返った。

そこには、笛を口から離れた先生が、ピストルを片手に千鶴を手招きしていた。困ったような、申し訳ないと言わんばかりに眉根を曲げて笑っていた。

内心、首を傾げながらも、千鶴は先生の元へ急いだ。

そうして見上げた先生は笑いながら千鶴の頭を撫でた。

「駄目じゃないか、千鶴ちゃん。ちゃんと合図が鳴ってから走らなきゃ」

「……え？」

……先生は何を言っているのだろう。

千鶴は実際に首を傾げて、先生を見つめた。それを見た先生は、千鶴の視線にまでしゃがんで頭を下げた。

「先に先に、って気持ちは分かるけど、ちゃんとルールは守らないと駄目だよ」

「……ちゃんと見てから走ったよ」

そう、ちゃんと先生の指が引き金を引くのを見てから。

なのに、先生は千鶴の言葉が気に入らなかったのか、曲がついた眉根をさらに曲げて、千鶴の頭をコツンと叩いた。痛くはなかったけど、痛かった。

「嘘を言っちゃ駄目。先生、ちゃんと見ているんだから。さあ、もう一回スタートするから、並んで並んで」

先生の言っていることが全く理解出来なかった。ちゃんと引き金が引かれてから走ったのに、どうして怒られているのだろうか。先生の言う嘘だって付いていないし、ズルだってしていないのに。

納得の出来ない理不尽を覚えつつも、千鶴はもう一度スタートラインに立った。

再び、園内に静寂が戻る。蝉時雨が、静まりかえった園内を木霊している。今度は、ゆっくり走ろう。

引かれる引き金。放たれる撃鉄。それらをじっくりと観察して、今度はちゃんと火薬の炸裂音を聞いてから飛び出した。

……なのに。

甲高いホイッスルが園内に響いた。

千鶴は、先生に注意されながらも、全員が走り始めてから走るところに決めた。
？

自分が他人と違うことに思い至ったのは、彼女が7歳の頃だった。

千鶴は、お腹いっぱいご飯を食べたことが無かった。といっても、家が貧乏であったわけでも、何かしらの病気を患ってというわけでもない。

母親から出される食事の量と、自身の食べたい量に差があっただけだったのだ。

かといって、虐待を受けていたわけでもない。千鶴の母親が出す料理は、7歳の子供が食べる量よりもはるかに多く、時には大人と同程度の量を出していたのである。

それでいて、千鶴の体形はほとんど横に変化しない。体重は平均より低いくらいで、胸を張って立てば、浮き上がった肋骨が皮膚越しに見えるくらいに、やせぎすな少女だった。身長もどちらかといえば低いくらいで、むしろ太らないことで両親から心配されたぐらい。

そのせいで一時期、断食紛いの絶食が行われたが、医者から健康体だと太鼓判を押されるとすぐに絶食は無くなった。母親に怒られるよりも、父親にからかわれるよりも、このときの絶食の方が辛かったと、千鶴は今も確信している。

それから、千鶴はどんなに食べても大人一人分程度に抑え、極力食欲を抑えることにした。幼いながらに自分が他人と違うことと、同年代の男以上に食べる自分が恥ずかしかったから。

もうひとつ、この頃、千鶴は他人と違う部分を知った。

ああ、もうこんな時間だ。

ふと見上げた時計を見て、千鶴はひとつ欠伸を零した。

お気に入りのマグカップに入れたミルクを飲みながら、毎週欠かさず見ているテレビ番組に熱中してから早1時間。最近学校で流行っている踊りを覚える為にも、眠いのを我慢して見ていたが、もう限界だ。

船を漕ぎだした娘を見て、千鶴の母はテレビを消した。

「千鶴、もう遅いから寝なさい。明日も学校でしょう」

「はーい、ママ」

残っていたミルクを全部飲み干し、空になったマグカップを母に渡す。先日買ってもらったモコモコしたスリッパを鳴らす。

「お休みなさい」

「お休み、千鶴。寝る前にトイレに行きなさい」

「はーい」

言われるがままトイレへ向かう。リビングを出ると、真っ暗な廊

下が眼前に広がっていた。照明が落とされた廊下はやけにひんやりとして、不気味な静けさを千鶴は覚えた。

さっさと済ませよう。

足元に気をつけながらトイレへ向かい、電気を付けて中に入る。トイレ独特の臭気が鼻孔に広がるが、千鶴は気にせずパジャマのズボンを脱ぐと、便座に腰を下ろした。

「……ふああ……眠い」

こぼれた欠伸を噛み殺しながら、千鶴は時間が過ぎるのを待った。排泄欲は全くない。6歳になったあたりだったろうか、それとも初めからだったのかは千鶴は覚えていない。いつの間にか千鶴は排泄というものを全く行わなくなっていた。

同じクラスの友達も自分と同じかどうかは分からないが、たぶん自分とは違うだろうと千鶴は漠然としながらも確信していた。

学校のトイレを使用したことがない生徒など、おそらく自分だけではないか。そんな考えすら千鶴の脳裏を過り、学校に通い始めてから1年程でそれは裏付けされた。

最初はトイレに行かなくて楽だと思っていたけれども、自分一人だけ違うというのも嫌だったから、こうして今日もトイレで用を足すフリをしている。

「……眠い……」

今日も頭の中で100数えてから、水を流して出た。

自分が“他人”と決定的に違うと確信したのが、11歳のときだった。

なんてことはない、一日だった。異常気象があったとか、大きな事件があったとか、テレビの向こうの誰かが歴史的快挙を成し遂げたとか、そんなことは一切ない、なんてことない昼間だった。

いつものように学校に向かい、いつものように授業を受けて、いつものように給食を食べて、いつものように昼休みに図書室で本を読んでいたときのこと。

その日はいつもと違って図書室に何人かの先生が集まっていた、いつもとは少しだけ違う空気が流れていた。

千鶴はいつもと違う図書室の様子に思わず踵を翻そうとしたが、それよりも早く図書室の先生が千鶴を見つけた。

「あら、千鶴ちゃん、今日も来たのね」

「うん、また来た」

にっこり笑った先生を見て、千鶴もつられて笑った。

ちよっと太っていて、垂れ目で優しそうなその図書室の先生が、千鶴は好きだった。彼女が持ってきてくれる本はどれも面白く、毎月発行される『図書室お勧めブック』を楽しみにしているぐらい、彼女のことが好きだった。

彼女の傍にいた他の先生達も千鶴を見て、軽く頭を下げた。

「先生、集まって何しているの？」

話しかけづらい雰囲気だけれども、好奇心に負けて尋ねた。図書室には千鶴以外の生徒はおらず、まるで自分が場違いな場所に紛れ込んだみたいで、落ち着かなかった。

「ちょうど今、本の整理をしていたのよ」

図書室の先生は、頬に手を当ててそう答えた。えくぼに浮かんだ皺が、さらに彼女を温和に見せた。

「整理？」

「そうよ。新しい本を入れようにも、本棚はもういっぱいだし、平積みして置くのも可哀そうで……だから、本の整理をしていたのよ」

「ふーん」

「ここにいる先生達は、本の整理を手伝ってくれているのよ。私人じゃ、本は重くて重くて……」

ちらりと普段見慣れない先生達の視線が千鶴の元へ向けられる。思わず、千鶴が身構えると、教師達は不思議そうに首を傾げた。

「あ、ああ、ごめんなさいね」

千鶴の様子に申し訳なさそうに図書室の先生は、集まった教師達に頭を下げた。

「千鶴ちゃんっていうんだけど、ちょっと人見知りなのよ」

……別に、人見知りではない。ただ、目立ちたくないだけだということを、千鶴は口には出さなかった。漠然と感じている自分と他人との違いを、誰かに知られなくなかったから。

新しい本を借りようと思っていたが、これでは借りられない。そう思った千鶴は、帰ろうかと思案した……そのとき、

「おーい、これはどこに置くんのだ」

図書室の奥にある図書補助室から、汗だくの男が姿を現した。千鶴の腕を6本束ねたかのような太い腕が、大きな段ボール箱を抱えていた。

「ああ、すみません。その奥の机の上に置いておいてください」

「ああ、はあはあ、分かった」

男は荒い息を吐きながら再び図書補助室の奥へ消えていくと、すぐに姿を現した。

「あゝ、重かった」

「ありがとうございます。あの段ボールは特別大きくて重い本が入れられていて……私一人ではとてもとても……」

「いやゝでも、あれは重いですよ」

筋肉質の男……確か、用務員だっただろうか。千鶴の頭の中で、朝の校門あたりでよく挨拶している男のことを思い出した。たしか、ベンチプレスで日本記録を持っているとかどうか、誰かが話しているのを聞いたことがある。

男の腕を見て、自分の腕と比べて、倍以上も太い腕、なるほどと思った。

用務員の男は椅子に腰を下ろすと、疲れたように肩を揉んだ。

「それにしても、あの段ボール箱って、本当に重いですね。いったい何の本が入っているんですか？」

「……ええつと、確か古い百科事典だったり美術標本だった感じがします。なんせ、あれを開けたのはもう何年も前の話で……」

「ああ、そうか。だからあんなに重かったんだ」

「そうでしょう……特別に段ボールが3重にされているくらいですから……確か、あの段ボール箱は100キロを超えていたような……」

「うへえ、そりゃ重い。僕達にはとても持てませんよ。せめて二人がかりじゃないと」

はなやかに笑い合っている教師達を見て、千鶴は一人考えていた。100キロ。いったいどれほどの重さになるのだろう。

千鶴にとって、今まで持った中で一番重かったのが、18リットル入りの灯油缶だ。といっても、千鶴は重いと思ったことはなく、むしろどう持ったら重いと思えるのか不思議ですらあった。

そう思えて、そう感じられる自身の力が不思議だった。年を取って、千鶴もある程度は常識を理解している。

理解したうえで、千鶴は自身の異常性がより理解出来てしまった。

「千鶴ちゃん」

突然掛けられた声に、千鶴は頭を上げた。申し訳なさそうに頭を下げる図書室の先生がいた。

「ごめんね、ちょっと先生達と一緒にこの本をどうするか教頭先生と話し合ってくるから、本を借りるの、今日は無理そうなの」

「え……あ、うん、大丈夫。今日は本を借りないから。本を読んでいるから」

借りようと思っていた本は、また後日にしよう。それよりも……。

千鶴は奥に置かれているであろう段ボール箱を思った。

「そう？ それじゃあ、千鶴ちゃん、また明日ね」

「うん」

ぞろぞろと先生達が図書室を出ていく。最後の一人が図書室を出て扉を閉めると、すぐに、千鶴は足早に補助図書室へ入った。

中に入ると微妙に湿気混じりのカビの臭いが脳天を突き抜けた。

だが千鶴はかまわず奥の……傍目にも大きいと思える段ボール箱を見つけると、傍へ歩み寄った。

大きい。

千鶴の記憶の中で見たことがないくらい大きな段ボール箱が、そこにあった。千鶴が3人は入れそうな段ボール箱の蓋をガムテープごとこじ開けると、中には重そうな本がぎっしりと詰まっていた。これが……100キログラム。

どくん、どくんと高鳴る心臓。あまりの騒がしさに、思わず胸に手を当ててしまった。手のひらには、はっきりとした鼓動が伝わってきた。

震える両足があまりに頼りなく、今にも膝から下が崩れ落ちそう
で、怖かった。

……何を、怖がっているの？

考えてみても、何も浮かんでこない。自分は何を怖がっているのだろうか。何を恐れているのだろうか、何を、何を、何を……知りたいと思っ
ているのだろうか？

その答えが、目の前の段ボール箱にあるような気がした。なんの変哲もないこの段ボールに何の答えを求めているのか、はつきりとは分らない。

でも、一つの答えが、一つの区切りが出来る、千鶴は思った。
ゆっくり、ゆっくり腰を下ろして、段ボールの底に指を差し入
れる。

思いの外軽く、段ボール箱が上がった。どきりと、胸が高鳴った。
100キロもある段ボールに指を挟めることが出来る……挟める程
度に持ちあげることが出来る事実、汗が噴き出た。

……神様。

数秒の時間が流れる。千鶴はふう、と息を吐いた後、腹筋に力を入
れて、腰を上げた。

その日、千鶴は自分が他人と違うことを思い知った。

？

14歳になった千鶴が不良となったのは必然だったのかもしれない。

「おい、千鶴よう！」

お世辞にも友好的には感じられない怒声と共に呼び掛けられた千鶴は、溜息をはいた。こういうふうに呼ばれるのは最早慣れたが、それでもたまには普通に呼んでもらいたいものだと思ったが、口には出さなかった。

「てめえ！ 無視してんじゃねーぞ！」

再度浴びせられた怒声にもう一度深いため息をはくと、千鶴は声の方へ振り返った。

そこには顔に包帯を巻きすぎて、もはやミイラのようになった大柄の男がいた。男の後ろには数人の男が同じように千鶴を睨みつけていた。

平均よりもかなり小柄で華奢な少女を大勢で睨むというのは、傍目からはかなり異様に見えるだろう。だが、男達には関係なかったのかもしれない。現に、校舎の中、授業の合間の休憩時間という人で溢れた衆人環視をものともせず、頭一つ分小さい女子相手に怒声を浴びせていたのだから。

「忘れたとは言わさねえ！ 人の顔をこんなにしやがってよう！」

包帯男は、鼻息荒く千鶴の眼前に立った。そうになると、さらに千鶴の小柄さが強調され、まるで大人と子供のような体格差が見て取れた。

どう見ても、酷い暴力だった。大多数で、弱い一つを狙う。圧倒的な力の差が、そこにはあった。

なのに、周囲の反応は冷ややかだった。

いや、それ以上に……憐れみすら、周囲の視線には込められていた。

「ちょっと、また多田がやっているわよ……」

「まじかよ……いい加減懲りたらいいのに……」

「勝てるわけないって……」

「あんなの相手にするなんて……」

ボソボソと会話する誰か。当然、その声は千鶴の耳にも届いていた。

陰口という行為は、実のところ千鶴はあまり嫌いではない。かといって好きでは決してないが、自分よりも強い相手、表立って言えないことを言える唯一の行為がそれであることを知っているので、陰口の一つや二つ言われたところで痛くも痒くもない。

たまに、陰口をするぐらいなら俺に言えとか、誰それに言えとかふざけた戯言を述べるやつもいるが、千鶴に言わせればそれは馬鹿以外の何者でもない。

そういった馬鹿な事をほざく人間に限って、本人に告げたら烈火のごとく怒るのだから性質が悪い。怒らせないよう、場を取り持つよう、下手に関係を悪化させないようにする為の陰口だ。それを分らないし理解しないからこそ、陰口で不満を吐きだすしか相手に対する憤怒を解消出来ないのである。

陰口を言われるのはそれなりの理由があるし、万人に好かれることなんて決してあり得ない。ましてや、自分はむしろ他人から嫌われるようなことしかしたことがない以上、陰口など叩かれて当然だ。もちろん、陰口は決して良い行いではないのは事実だが、それが分かっている千鶴は、陰口を言われても仕方がないと自分で理解している。だから陰口を叩かれても、それを話している相手に対してこれといった怒りは持たなかった。

千鶴の視線が生徒達へ向けられる。途端、一斉に顔を背けるのを見てから、やれるものならやってみろと言わんばかりに声を張り上

げた。

「ああ！？　コソコソ喋ってないで、言いたいことがあるなら私に話してみろよ」

……返事は、返ってこなかった。当然だ。

誰だって、好き好んで喧嘩を売られたくないし、いざこざを作りたくないに決まっている。回避出来るなら、出来る限り回避するのが一般的な考えなのだ。

これではらくは黙っているだろう。

それよりも……。

「それによ……」

寒気にも似た感覚が背骨を駆け上がって行くのを感じた。頭の中が真っ赤に染まり、体中の毛穴から体温が一気に噴き出し、シミ一つない肌からうっすらと汗が滲み出た。

興奮のあまり充血して血走った眼球が、自らを見下ろす男へ向けられる。

そのあまりの迫力に、思わず男は身体を硬直させた。黙っていればアイドルとしても通用しそうな美しさが幻に思えてしまうくらいに変化した異様な形相に、息を呑むしかなかった

だが、そんなことで許す千鶴ではなかった。

「てめえが売ってきた喧嘩をアタシが買って、てめえをボコボコにした……そのあげくが、仲間引き連れてお返し騒ぎか！？」

身に着けていた学校指定のブレザーを脱ぎ捨てる。放り投げた先にいた生徒が慌てて避けたのを横目に見ながら、両手を揉んだ。

ぽき、ぽき、と千鶴の小さな手の細い指が音を立てる。

ブレザーの中から現れた年不相応の前に張り出した胸囲が、年ごとの男ならずとも思わず目を見張ってしまう魅力を放っていたが、本人が放つ憤怒の波動がそれらを中和していた。

いや、中和どころか、むしろその可愛さが迫力を増長させているのかもしれない。

今ではすっかり委縮して涙目になっている男たちの姿を見ると、

あながち間違いではないだろう。

「反吐が出る……てめえの小者具合に……屑具合に……なにより、その程度で済ませたアタシの仏具合に……!!」

噛みしめた歯が音を立てた。その音にすら肩を強張らせる男たちには、先ほどまであった戦意は、もうないだろう。

だが、もう遅い。

「いいだろう……二度と病院から出られない身体にしてやる!!」

男たちの悲鳴が、学校中を木霊した。

後に『千鶴の乱』と呼ばれるようになるこの出来事は、死者こそ出なかったものの、負傷者18名に及ぶ大惨事となった。

重傷者7名、軽傷者11名を出したこの事件は傷害事件に発展し、千鶴は一時警察に逮捕されるまで事態が大きくなった。

もつとも、加害者が女の子であるということと、相手が十数人で一人を襲うということから、千鶴は保護観察処分となり、事件は一ヶ月程で鎮静化した。

高校生になった千鶴は、地域では知らぬものはいない程の札付きの不良というやつになっていた。幸い、頭は悪くない千鶴は、県では平均程度の高校に入学出来たのだが、噂は県内の学校全てに広まっていた為、関わりうとするような人は居なかった。

入学してから二カ月。千鶴は、ある意味では居ないモノとして扱われるようになり、透明人間になった。

もはや一般生徒と呼ばれる同級生に話しかけてくるものは居らず、教師はおろか親ですら千鶴とはほとんど口を利かなくなっていた。

それでいいと思った。そうでなければならぬと思った。

他人とは違う自分には、それでいいと、思った。

これで楽だ。煩わしいことは何もない。

千鶴は、そう考えるようになった……同時に、千鶴は孤独だった。行ってきた行為が原因だとしても、ただ、寂しかった。

誰かに……打ち明けたかった。
他人と違う。

決して相容れない。

絶対に相談できない。

相談出来るわけがない。

相談したいわけではない。

ただ、誰かに聞いてほしかった。

ただ、誰かに知ってほしかった。

ただ、誰かに言ってほしかった。

あなたは……千鶴は……『人間である』……と。

誰かに、誰かに、誰かに、断言して欲しかった。それだけが……
誰にも話したことがない、千鶴の言葉だった。

だから、だろう。千鶴が彼女を見たとき、全身に鳥肌が立ったのは。

自分と同じくらいの背丈……ワンピースから見える肌からも分かるくらい華奢な体つき……一目でワケありだと分かる風貌と雰囲気
が、彼女にはあった。

そして、それら以上に、千鶴には分かった。理解できた。

彼女は、自分と同じく他人と違うということ……自分以上の、化け物であるということが、なぜか理解できた。

だから……千鶴は彼女と話すことにした。

それがどういふ結果になるか、千鶴には分からなかった。

殺されるのだろうか最初考えた。殺されるという単語が最初に思いつくあたり、彼女に対する考えを自覚して、千鶴は一人苦笑した。

でも、それでも、千鶴は彼女と話そうと思った。

真っ赤な目をした彼女と……。

番外 如何にして少女は彼女に惹かれたか（後書き）

超久しぶりの更新。そろそろ他人の方も更新しようかな。
怨霊少女は……完結しているから、いいかな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5798h/>

綾 第二章

2011年3月12日07時53分発行